

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立輪島高等学校

1 学びがあり進路実現できる学校				
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定	成果・課題・改善策
① 生徒が集中して学習に取り組める環境を整備し、個々のライフプランに応じた適切な指導を行う。	* 大学模擬授業や学校説明会の実施	大学模擬授業や学校説明会が自分の進路決定に役に立ったと感じた生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	72% C	成果：大学模擬授業を実施した1、2年普通コースの生徒で特に1年生で評価が高かった。文理選択の決定にも役立ったと考えられる。 課題：進路希望が四年制大学以外の生徒からは評価が低かったと考えられる。3月には就職希望者むけに企業のガイダンスも含めた進路ガイダンス（学校説明会）を実施し、進路について考える機会を設ける。 改善策：実施時期を前倒し、進路について考えてもらう。
② 「コア輪島」「夢道場」などの自主学習活動を通して、生徒が主体的かつ発展的に学ぶ姿勢を育成する。	* コア輪島、生徒間の学び * スタサポの振り返り * 模試の分析	模擬試験で英国数総合の平均点偏差値が50を超えることができた割合が A：30%以上 B：25%以上 C：20%以上 D：20%未満	31% A	成果：1年生では60名中14名、2年生では59名中22名、3年生では34名中11名が国数英総合偏差値50以上であった。 課題：学年別でみると、2、3年生は目標値を上回っているが、1年生は成績が向上しているが、目標数値には届いていない。 改善策：低学年期での学習習慣の確立と、学年集会や個別面談等を通し進路に向けた動きを早期にするような働きかけをする。
③ 教員の授業力を高め、教科横断的な授業を取り入れ、3年間を見通した組織的な教科指導と進路指導の実践を図る。	* STEAM校内研修 * 探究型学習の授業研究（オンデマンド研修も活用） * 相互授業参観 * 教科横断型授業の実施	教科横断型授業を実施し、その研究や改善のための取組や振り返りの会に参加した教員の割合が A：70%以上 B：50%以上 C：30%以上 D：30%未満	88% A	成果：STEAM校内研修を行った。校外研修に参加した教職員もいる。学びウィーク中に教科横断型授業の実施、相互授業参観を促した。半数以上の先生方が教科横断型授業を実施した。 課題：教科横断型授業の実施が一度きりで終わる教員が多く、その先の研究が進んでいない。教科横断型の授業の機運が高まっていない。 改善策：研修などを通して、探究学習の授業研究を進める。教科横断型授業の実施、相互授業参観を促す。
学校関係者評価委員の評価	・ 社会に出た時の行動の仕方で教育の場でどのような学びを重ねてきたか分かる。その時、しっかりした力が身につくように、学びの環境を組織的、且つ、系統的に整えてもらいたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策	・ 現在行っている「WAJI活」に真摯な姿勢で臨んだ生徒は目的を持った学びを重ねており、その結果が進路実績にも繋がっている。今後も探究活動を組織的に行い、生徒の主体的な学びの力の育成に繋げる。			

2 地域と共に人間力を向上できる学校				
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定	成果・課題・改善策
① 部活道については、生徒教職員自ら活動場所や活動内容に創意工夫を加え実施するとともに、再編や地域展開も推進する。	* 部活動、ボランティア * 球技大会、文化祭	部活動や学校行事が自己効力感を高めるための取組により、自身の主体性が高まったと感じる生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満	86% A	成果：生徒会執行部を中心とし、新しいことに生み出し、挑戦することができた。その活動経験により生徒に対応力や行動力が身についた。 課題：復旧工事で練習場所減少が予測される。肯定的な割合が31Hで33%、また、11・12Hでは10%以上減少している。これは部活動の引退や退部が関係していると推測される。 改善策：輪島市との連携を密にし、練習場所確保や地域との繋がりを深める。また、部活動のみならず、学校行事全般を通じて、生徒が自己効力感を得られるように企画立案、実施していく。
② 学校行事を通して、他者を思いやり個々の多様な価値観を理解しながらよりよい人間関係を築こうとする心を育成する。	* 防犯教室 * エンカウンターによる人間関係づくり * 学年集会	スマートフォン等によるインターネットトラブルやSNSの使い方に対する安全・予防対策を行っている生徒の割合が A：100% B：90%以上 C：80%以上 D：80%未満	93% B	成果：県警講師による防犯教室を行った。また、弁護士によるSNSネットトラブルの事例紹介など、より具体的な他者との関り方を学んだ。このように外部講師による講座で、生徒の意識を高めることができた。 課題：定期的な開催には講師の選定が必要である。より効果的な実施のため、様々な分野に長けた講師に関する教員間の情報共有が必要である。 改善策：次年度以降はSNSの使い方に関する調査を実施する予定である。現状や変化を調査することで生徒の状況を的確に把握し、より効果的な対策を練ることができると考えている。
③ 「ふるさと創生」に特化した「街プロ」を外部機関と連携しながら充実させ、地域貢献意識の向上と未来を創造し変える力の育成を図る。	* WAJI活 * 輪高生による街づくりプロジェクト * 課題解決型学習	「WAJI活」や国際交流に主体的に取り組むことで、自分の創造性を高めることができたと考える生徒の割合がPISA調査との比較において A：世界ベスト10 B：世界平均以上 C：日本平均以上 D：日本平均未満	80% PISA2025の結果が公表され次第判定	成果：生徒アンケートでは、「WAJI活」のグループ別探究を積極的に行った2年生で肯定的評価が91%だった。 課題：1年生で中間評価よりも肯定的評価を10%以上下げたクラスがあり、1年生の取組が生徒にとって主体的なものになるよう工夫が必要である。 改善策：地域課題に関わる講演やワークショップの実施、2年生との連携などを通して課題意識を深め、主体的に活動する機会を設けるなど、探究基礎の段階から生徒自身が自らの創造性を育てているという実感が持てるようにする。

2 地域と共に人間力を向上できる学校				
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定	成果・課題・改善策
④ 小中学校との生徒間交流事業や教員研修、各種団体との連携を通して「オール輪島」で生徒を育てる。	*相互授業参観 *教科間交流	校種間での相互授業参観や教科間交流等に参加した教員が A：90%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満	88% B	成果：小中学校で行われた公開授業等に本校のほとんどの教員が参加できた。 課題：小中学校の公開授業が他校の兼務日だったり、当日の時間割に空きがない教員には参加できない場合があった。 改善策：公開授業日当日の時間割調整を行い、全教員が公開授業等に参加しやすい環境を整える。
⑤ 地域教育の中核を担う学校として、被災経験から得た経験と知識をいかして、防災意識の向上や防災教育の推進に努める。	*防災教育 *危機管理	防災避難訓練を通じて、防災についての意識が高まったという生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：50%以上 D：50%未満	92% A	成果：生徒のみならず、教職員に対しても実施日時を通知せずに実践的な訓練を実施した。生徒アンケートからも、防災に関して、真剣にとらえ、実践しようという気持ちが育っている。 課題：全体の評価が上昇しているが、3年生の評価が低い。発災から2年が経過し、生徒間の防災意識に差が生じ始めていると考えられる。 改善策：主体的な行動力を育成する実践的な訓練を計画することはもちろん、防災意識が風化しないようその大切さが育まれるように訓練の実施形態を工夫する。
学校関係者評価委員の評価	・「WAJI活」を始めとする探究活動では、国際交流など、生徒の学びの幅が広がっている。今後もその環境を整備して拡大してほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策	・現在、OECDとの繋がりをきっかけとし、多くの団体とのネットワークが拡大している。輪島高校だけの取組に留まらず、奥能登地区の高校との連携や、小中高の校種を超えた連携も模索する。			

3 多忙化改善を積極的に実現できる学校				
重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	判定	成果・課題・改善策
① 生徒、教職員ともにセルフマネジメントに対する知識や意識を高め、新しい時代に対応できる行動力の向上に努める。	*行事の精選・省力化 *定時退校日の設定 *主任等ミーティング	時間外勤務時間が、一ヶ月当たり45時間以下の教員の割合が A：70%以上 B：50%以上 C：40%以上 D：40%未満	39% D	成果：定時退校日が徐々に実質化している。 課題：部活動の遠征や探究学習に伴うイベントや発表会等の生徒引率により時間外勤務が増加した。 改善策：複数の顧問を配置している部活動において、平常練習の監督や指導を単独で行ったり、遠方の遠征を減らすなど、教員一人ひとりの拘束時間の軽減に努める。
	*先生方との情報共有 *SC、専門機関との連携 *ストレスチェックの実施、分析 *職員研修	「学校の中に相談できる人がいるか」という質問で「いる」と回答した生徒の割合が A：50%以上 B：40%以上 C：30%以上 D：30%未満	54% A	成果：昨年度は30%だったことに比べ、1年間で大幅に改善された。特に相談先に「担任」と回答していた生徒が多かったことで、人間関係の構築が順調に行われていると考えている。 課題：一方でストレス値が高い生徒が「いない」と回答している傾向が高く、今後は個人へのアプローチが必要になると感じた。 改善策：相談先に担任以外もあげられるよう生徒との関係づくりを進めていく。部活動や教科担当などの立場からも生徒と積極的に関わり、積極的生徒指導を目指していく必要がある。
	*毎朝の登校指導 *挨拶運動 *チャイムの停止	生徒の不注意による遅刻「0」の日数が年間を通して A：130日以上 B：120日以上 C：110日以上 D：110日未満	166日 A	成果：昨年度は1学期の始業時間が通常よりも30分遅かった影響があり目標が達成されたが、今年度は通常通りの始業時間で、達成率は84%だった。遅刻者の指導だけでなく、遅刻者がいないクラスへの表彰などがモチベーションを高めた。 課題：不注意による遅刻者の年間達成日数を目標にしている。 改善策：来年はさらに踏み込んだタイムマネジメントの目標設定にする。
学校関係者評価委員の評価	・遅刻指導などの生徒指導について、懲罰的な指導ではなく褒める指導によって効果が出ている。今後も継続してほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策	・行動を認め、それを褒める指導をすることで、本来とるべき行動が生徒に浸透し始めている。より多くの生徒が主体的かつ継続的な行動力を身につけられるよう、褒めて伸ばす指導方針を継続していく。			